識者座談会　中ソ首脳会談を終えて　朝日新聞夕刊-1989.05.19

東側から国際政治変革の風

中ソ首脳会談を終えて　識者座談会

十五日から行われた中ソ首脳会談は、社会主義両大国の三十年ぶりの歴史的な和解だった。そして、そのさ中に爆発した中国民主化要求の巨大なうねり。国内改革の課題を抱える両国の指導者たちの苦悩が改めて浮かび上がる一方、国際社会の政治地図を東側から大きく塗り替える動きが俄然現実のものとして見えてきた。首脳会談は、中ソ双方と世界に何をもたらすか――両国の共同コミュニケが出た十八日夜、四人の識者の方々に話し合ってもらった。

出席者

鹿取　泰衛氏（六七）　国際交流基金理事長（前駐ソ、元駐中国大使）
永井　陽之助氏（六三）　青山学院大教授（国際政治学）
中嶋　嶺雄氏（五三）　東京外語大教授（中ソ関係論）
下斗米　伸夫氏（四三）　法政大教授（現代ソ連政治）
司会　浅井　泰範・朝日新聞東京本社編集局次長

―歴史的な四日間のゴルバチョフ・ソ連共産党書記長の訪中をめぐる、さまざまな波紋についてご意見をうかがいたい。大きなポイントは二つあると思う。第一に、中国の民主化の動きとソ連のペレストロイカ（改革）の旗手ゴルバチョフ書記長の訪問が重なり、社会主義体制の中での人権、自由といった問題が浮かび上がった側面。もう一つは、背後に政治、経済、軍事などの問題を抱える二大社会主義国が、三十年ぶりに握手したことの国際社会への影響だ。

まず、前者から入りたいが、中国とソ連で起きている改革の大きなうねりの印象から。

鹿取　私が駐中国大使だった八一―八四年のころ、中国は経済改革一本で、農村でそれなりの成果をあげていた。農村から始めたのは賢明で、都市に手をつけるには政治改革が必要となる。それを本気でやろうとして胡耀邦・前共産党総書記は更迭された。今回の天安門広場のような状況は、とても考えられなかった。

中嶋　天安門広場のデモをみにしたのは、自分が難しい立場にあることを学生たちに伝えたかったのかもしれない。趙氏が「第二の胡耀邦」になるかもしれないし、鄧氏がマルコス比前大統領のように学生から今のポストを追われるかもしれない。それぐらい状況は深刻だ。

ところが中国の場合はその伝統が残されたと思う。民主化の旗手であるゴルバチョフ書記長が来たことで、中国の政治改革の遅れを浮き彫りにした。西側からの自由化なら、これほどにらは影響を与えなかったろう。兵士や警官までデモに加わっているということは、中国共産党中央のかなり概要なところまで対立が広がっているのではないか。

――これから注視しなければならない点は。

中嶋　学生の動きはまだ拡大するだろう。ゴルバチョフ書記長の前であればこそ大きくみえたが、鄧小平・中央軍事委主席を学生が指弾し始めているところに、外からみえない深刻さがある。趙紫陽・党総書記が、すべては鄧氏が決定している、と明らかにしたのは、自分が難しい立場だけでなく、労働者や政府機関が、中国の指導者には大変な課題が残されたと思う。民主化の胡耀邦氏のように学生から今のポストを追われるかもしれない。それぐらい状況は深刻だ。

―歴史的な四日間のゴルバチョフ・ソ連共産党書記長の訪中をめぐる、さまざまな波紋についてご意見をうかがいたい。大きなポイントは二つあると思う。第一に、中国の民主化の動きとソ連のペレストロイカ（改革）の旗手ゴルバチョフ書記長の訪問が重なり、社会主義体制の中での人権、自由といった問題が浮かび上がった側面。もう一つは、背後に政治、経済、軍事などの問題を抱える二大社会主義国が、三十年ぶりに握手したことの国際社会への影響だ。

まず、前者から入りたいが、中国とソ連で起きている改革の大きなうねりの印象から。

鹿取　私が駐中国大使だった八一―八四年のころ、中国は経済改革一本で、農村でそれなりの成果をあげていた。農村から始めたのは賢明で、都市に手をつけるには政治改革が必要となる。それを本気でやろうとして胡耀邦・前共産党総書記は更迭された。今回の天安門広場のような状況は、とても考えられなかった。

中嶋　天安門広場のデモをみにしたのは、自分が難しい立場にあることを学生たちに伝えたかったのかもしれない。趙氏が「第二の胡耀邦」になるかもしれないし、鄧氏がマルコス比前大統領のように学生から今のポストを追われるかもしれない。それぐらい状況は深刻だ。

ところが中国の場合はその伝統が残されたと思う。民主化の旗手であるゴルバチョフ書記長が来たことで、中国の政治改革の遅れを浮き彫りにした。西側からの自由化なら、これほどにらは影響を与えなかったろう。兵士や警官までデモに加わっているということは、中国共産党中央のかなり概要なところまで対立が広がっているのではないか。

――これから注視しなければならない点は。

中嶋　学生の動きはまだ拡大するだろう。ゴルバチョフ書記長の前であればこそ大きくみえたが、鄧小平・中央軍事委主席を学生が指弾し始めているところに、外からみえない深刻さがある。趙紫陽・党総書記が、すべては鄧氏が決定している、と明らかにしたのは、自分が難しい立場だけでなく、労働者や政府機関が、中国の指導者には大変な課題が残されたと思う。民主化の旗手であるゴルバチョフ書記長が来たことで、中国の政治改革の遅れを浮き彫りにした。西側からの自由化なら、これほどにらは影響を与えなかったろう。兵士や警官までデモに加わっているということは、中国共産党中央のかなり概要なところまで対立が広がっているのではないか。

――これから注視しなければならない点は。

中嶋　学生の動きはまだ拡大するだろう。ゴルバチョフ書記長の前であればこそ大きくみえたが、鄧小平・中央軍事委主席を学生が指弾し始めているところに、外からみえない深刻さがある。趙紫陽・党総書記が、すべては鄧氏が決定している、と明らかにしたのは、自分が難しい立場にあることを学生たちに伝えたかったのかもしれない。趙氏が「第二の胡耀邦」になるかもしれないし、鄧氏がマルコス比前大統領のように学生から今のポストを追われるかもしれない。それぐらい状況は深刻だ。

（左から）下斗米、中嶋、永井、鹿取の各氏。右端は司会の浅井編集局次長＝朝日新聞東京本社で

民主化要求

鄧指弾の動き深刻

ソ連も同質の課題

民有化過程の現象

永井氏

中嶋氏

下斗米氏

鹿取氏

コミュニケ

経済で共同行動も

東欧との関係微妙

変容する社会主義

中嶋氏

下斗米氏

鹿取氏

―共同コミュニケが発表されたが、これを読んで中ソ和解をどう見るのか。

永井　中ソ和解というのは、国際政治学者は十年前から予想していたことだ。しかし日本の外交当局などは、日本がGNP一％程度の軍事力でやっていけるのは、中ソが対立し、やがて米、中、日が協調してソ連に対抗していくことになるからだと考えていた。だから和解が五年や十年前に突然起きていたら大変で、日本には核武装が必要だという極論まで出てきたかもしれない。

鹿取　正常化によって、当たり前の関係になったというだけのことでしかない。ただコミュニケでは、新国際経済秩序を確立することが急務であると述べている。中ソが、国際経済の分野で先進国に対し共同行動をとるかもしれないということに留意する必要がある。

永井　これまでの社会主義諸国間の関係は垂直的、つまり、後の社会主義は、本質的な自由や民主化を求める動きによって、内部から崩されていくと思う。これにどう対応していくかという共通項を持った国同士が、ゆるやかな同盟関係を形成していく動きが出てくる。そうするかどうかということは大変な問題だ。

中嶋　宗教戦争のような非妥協的な争いをした両国が、ここまで〝復縁〟したというのは、イデオロギーの終わり、そして、いかに現代の社会主義諸国が変容してきているかを確認させたという意味で意義深い。今言い出したことは実現しなきている。従来、ソ連は海軍兵力、とりわけ海軍力については絶対に削減など言い出さないと見られてきた。それが今回はかなり具体的な提案をしている。単なる平和攻勢とか、まやかしとしてすまされない問題が出てきたのではないか。

下斗米　驚いたのは、コミュニケの中で国境地帯の軍事力を最低水準にまで下げる、といっている点だ。これに中国側が合意したのはショックというか、面白い現象だ。中国側は今年二月、シェワルナゼ外相との話し合いのときには、今後「隊子を見る」という姿勢だった。その後、両者がかなり歩み寄ったということだろう。

永井　ゴルバチョフ軍縮の特徴を、あるアメリカの学者は「プリエンプティブ・リダクション（先制削減）」と表現している。相手の出方を考慮せず一方的に削減を打ち出す。ブッシュ米大統領はイニシアチブを奪われ、後手後手に回っている。かつてソ連が危機時代の軍拡でとった強硬な独行動は、相手の出方に応じた動きではなく、自国内部の要因によるものだった。今の動きは、自国内部の要因によって逆に軍縮の方向に向けて努力しており、北方領土問題の重視と書記長訪日の問題は矛盾しない。

中嶋　しかし、日本だけが米国のはめた「枠」を忠実に守っているという感じが強い。対ソ関係の最前線に出ている。その辺の発想の転換がないと、書記長が来ても前進は望めない。

下斗米　中ソ対立の時代には双方とも体制の違いを強調していた。〝エリツィン現象〟を支持している民衆が、食糧問題などで制度にのらずに下から突き上げてくることへの同質性があるからだと学んだはずだ。

鹿取　ソ連のテレビは天安門のデモをあまり放映しなかった。訪問に対するエチケットもあるだろうが、あれだけの熱気をソ連の民衆と見せることの問題を考えて放映しなかったのかもしれない。

下斗米　両国は改革の型が違うが、中国は七八年の農業改革でもそうだが、規制が外れると一ッと動き出すタイプだ。政治の規制が外れると百万人集まってしまう。ソ連は規制を外しても、民衆はなかなか動かない。

永井　天安門のデモにしてもリクルート事件にしても、根源には共通のものがある。共産圏ではソ連、中国での改革、さらに日本では中曽根時代の民活など。その根本はプライバタイゼーション（民有化）だ。公的セクターから私的セクターへ移る時は、富と権力の移動を伴う。似たような現象はこの十年ぐらいに全世界で起きている。それが中国では顕著に現れている。

中嶋　鄧氏は首脳会談後、身を引こうと思っていた。だがこの機ぎでタイミングが失われた。学生らに突き上げられる形のままでやめるわけにはいかなくなった。

下斗米　中国の民主化の動きをどう見たらいいか。

永井　学生の動きは、ある種同質の問題が出て来て、両国の指導者に突きつけられた。ソ連は経済状態が悪く、政治改革で突破を図っているかにみえる。だからゴルバチョフ書記長の訪中に中国民衆が期待を持ってしまうという意図せざる効果があった。胡耀邦氏の更迭でフタをされてしまった問題が再燃した。しかも、民衆の側からだ。学生や知識人がないために、民衆の改革を求めるエネルギーが一気に噴き出た。ソ連でもこれは起きかねない。〝エリツィン現象〟を支持回のデモをあまり放映しなかった。訪問に対するエチケットもあるだろうが、あれだけの熱気をソ連の民衆と見せることの問題を考えて放映しなかったのかもしれない。

下斗米　両国は改革の型が違うが、中国は七八年の農業改革でもそうだが、規制が外れると一ッと動き出すタイプだ。政治の規制が外れると百万人集まってしまう。ソ連は規制を外しても、民衆はなかなか動かない。

永井　天安門のデモにしてもリクルート事件にしても、根源には共通のものがある。共産圏ではソ連、中国での改革、さらに日本では中曽根時代の民活など。その根本はプライバタイゼーション（民有化）だ。公的セクターから私的セクターへ移る時は、富と権力の移動を伴う。似たような現象はこの十年ぐらいに全世界で起きている。それが中国では顕著に現れている。

中嶋　鄧氏は首脳会談後、身を引こうと思っていた。だがこの機ぎでタイミングが失われた。学生らに突き上げられる形のままでやめるわけにはいかなくなった。

対日関係

「覇権条項」逆に脅威の面

日ソ交渉評価発言に注目

永井氏

鹿取氏

―アジア安保について、話し合う枠組みというか、システムを作ろうという点についてはどうか。

鹿取　構想の範囲は、ソ連の軍事的存在が大きい北太平洋だけでなく、太平洋全体を含めた漠然としたものだ。ソ連が直接、間接に影響を与えているカンボジア紛争とか北方領土問題に触れる努力をすべきなのに、いきなり大ぶろしきを広げた。

―ゴルバチョフ書記長の政権基盤についてはどう考えたらよいか。

下斗米　基盤は強化されている。五月二十五日からの人民代議員大会でソ連版〝大統領〟になり、執行権を得る。国防・安全保障についても、「国民の要望だから」という形で軍事予算の削減、軍需工場の民生用への転換を実施することは間違いない。しかし、政権が強化されて米、中、日が協調してソ連に対抗していくことになるからだと考えていた。だから和解が五年や十年前に突然起きていたら大変で、日本には核武装が必要だという極論まで出てきたかもしれない。

鹿取　正常化によって、当たり前の関係になったというだけのことでしかない。ただコミュニケでは、新国際経済秩序を確立することが急務であると述べている。中ソが、国際経済の分野で先進国に対し共同行動をとるかもしれないということに留意する必要がある。

永井　これまでの社会主義諸国間の関係は垂直的、つまり、後の社会主義は、本質的な自由や民主化を求める動きによって、内部から崩されていくと思う。これにどう対応していくかという共通項を持った国同士が、ゆるやかな同盟関係を形成していく動きが出てくる。そうするかどうかということは大変な問題だ。

中嶋　宗教戦争のような非妥協的な争いをした両国が、ここまで〝復縁〟したというのは、イデオロギーの終わり、そして、いかに現代の社会主義諸国が変容してきているかを確認させたという意味で意義深い。今言い出したことは実現しなきている。従来、ソ連は海軍兵力、とりわけ海軍力については絶対に削減など言い出さないと見られてきた。それが今回はかなり具体的な提案をしている。単なる平和攻勢とか、まやかしとしてすまされない問題が出てきたのではないか。

下斗米　驚いたのは、コミュニケの中で国境地帯の軍事力を最低水準にまで下げる、といっている点だ。これに中国側が合意したのはショックというか、面白い現象だ。中国側は今年二月、シェワルナゼ外相との話し合いのときには、今後「隊子を見る」という姿勢だった。その後、両者がかなり歩み寄ったということだろう。

永井　ゴルバチョフ軍縮の特徴を、あるアメリカの学者は「プリエンプティブ・リダクション（先制削減）」と表現している。相手の出方を考慮せず一方的に削減を打ち出す。ブッシュ米大統領はイニシアチブを奪われ、後手後手に回っている。かつてソ連が危機時代の軍拡でとった強硬な独行動は、相手の出方に応じた動きではなく、自国内部の要因によるものだった。今の動きは、自国内部の要因によって逆に軍縮の方向に向けて努力しており、北方領土問題の重視と書記長訪日の問題は矛盾しない。

中嶋　しかし、日本だけが米国のはめた「枠」を忠実に守っているという感じが強い。対ソ関係の最前線に出ている。その辺の発想の転換がないと、書記長が来ても前進は望めない。

説の中に、アジアにおける日ソ関係の重要性に言及し、最近の日ソ交渉を評価する意味のくだりがあったことは注目してよい。日本政府も書記長訪日へ向けて努力しており、北方領土問題の重視と書記長訪日の問題は矛盾しない。

中嶋　しかし、日本だけが米国のはめた「枠」を忠実に守っているという感じが強い。対ソ関係の最前線に出ている。その辺の発想の転換がないと、書記長が来ても前進は望めない。

永井　日本との関係で、一つ注意しておきたいのは、コミュニケに「中ソ関係正常化は第三国の利益を損なうものではない」とある点だ。日中平和友好条約では、いわゆる「覇権条項」があり、当時の了解ではソ連を対象としていた。キッシンジャー元米国務長官は当時、中ソ関係が変化すれば、中国は日本を相手に覇権条項をつくるかもしれないとコメントしていた。それを考え合わせると、この条項は逆の意味で日本に対する脅威になると思う。

―中ソ首脳会談は日本にどう影響するだろうか。

鹿取　今回のゴルバチョフ演